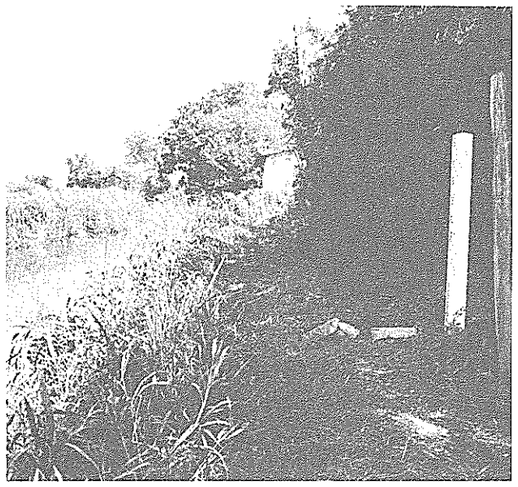
文化財をたずねて⑭

《大湊跡》

土佐の国司紀貫之が、四年の任期を終え、京都へ帰るときの紀行文が土佐日記である。

日記によると、承平四年（九三四）十二月二十八日、浦戸を出て大湊に着いた。それから毎日のように、波風にさえぎられて船が出ず、十一日間も滞在した。ところがその大湊の位置が、今にはっきりせず、十市、前浜、夜須、手結などをあげる人が多く、学問的論争もあったが、今では、前浜説に軍配があがったようである。

安永三年（一七七四）野見嶺南が、大港図記によって前浜説をとなえ、鹿持雅澄もこれに賛成した。

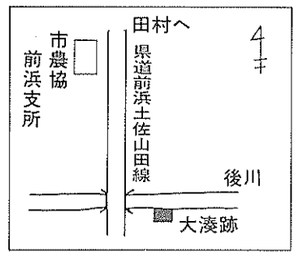


大湊説が有力な後川の前浜寺家部落付近

浜改田から、久枝浜におよぶ海岸砂丘の北面には、切戸を湾口として、東西に横たわる大きな入江があった。前浜砂丘の北面では、北方から陸地が湾にせまり、湾はヒョウタン形となって、東部と西部がひろがっていた。

先年三和小学校西南の水田から、船の櫓が掘りだされたことでも、昔の湾の状態がうかがえる。また中央部の西の高田では、耕作中にドスイがでることがある。これは弥生時代に、漁網に使ったものである。また大湊小学校南に、鴻巣という地名があるが、これは鴻の鳥が、湾岸のアシの間で遊んでいたので、かく呼ばれるようになったものと思われる。

操船技術が幼稚で、船の操作のまずかった昔は、海上から船を乗り入れるには川口港がよかった。貫之も、奈半利や室津の川口に船をつけ泊地とした。当時の大湊も、物部川の川口港であったと思われるが、今では、後川が昔の面影をとどめているにすぎない。



地元のかたのお話

○現在、大湊跡と書かれた柱が建っている後川は、水の流れがとてもきれいで、子どものころは泳いだり、また洗い物などもみんなここでしていました。

昔、物部川は今より西の方を流れ、河口ももっと広く入りくんでいたそうです。私は野見嶺南の「大港図記」の写しを、ここに持っています。それによると、河口の方が湾のように入り組んでいたように、書かれていますが、私もその通りだったと思います。

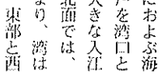
ここが、土佐日記に出てくる〝大湊〟かどうかはわかりませんが、昔は大きな川口港として栄えていたことは、確かだと思います。

浜田善三郎さん

○この辺は砂地で、井戸を掘ったとき、十五㍍も砂ばかりで困ったことがありました。

以前、前浜小学校と南部小学校が統合されて、新しく名前を付けるとき、地名には大湊という名前は残っていませんでしたが、前浜が土佐日記の大湊説に有力ということで、大湊小学校と名付けられたそうです。

浜田弥芳さん



ご家庭で話し合って答えてください。答えは、この広報に出ています。

■**もんだい**・秋の交通安全運動期間中の九月二十一日、市農協が○○○○○○着用を宣言した。

■**しめきり**・10月15日

■**おくり先**・〒783　南国市大埔甲二三〇一　南国市役所内広報委員会親子クイズ係

■答えのハガキには**必ず、住所**　**部落名・氏名・年齢・職業**を書いてください。

■**賞品**・特賞千円＝三人、残念賞（記念品）＝五人

第131回正解者発表（敬称略）

（応募総数45通）

■**こたえ**・南国市（文化祭）

■**特賞**・千円＝三人

入交準（大埔）

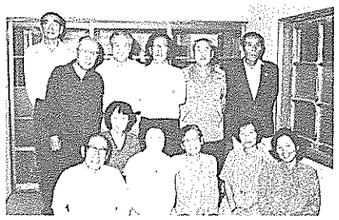
笠原千加（東崎）

有吉和人（大埔）

■**残念賞**・記念品＝五人

山本陽子（稲生）片岡順二（大埔）門田清子（奈路）松岡賢一（稲生）武市慶子（大埔）

がんばってます　サークル紹介 ⑧



岩村句会のみなさん

十七文字の叙情詩を味わう

～岩村句会～

この俳句会の歴史はとても古く、昭和二十九年一月三日、みづほ句会として四名で発足、三十一年岩村句会と名を変え、この九月で創立句会から三百四十七回目をむかえました。

最初は、個人の家庭を巡回したりしていましたが、現在では岩村地区公民館で、毎月第二土曜日午後八時から例会を持っています。またこの他年二回程度、県内外に親ぼくをかね吟行に出かけています。

会員は十三名、うち女性が五名で平均年齢は五十代です。リーダーは池植章さんですが、会員の皆さんベテランぞろいで、それぞれの主体性にまかせて自由に創作しています。また、発足当初から参加している和田幸郎さんが世話役を務め、吟行会の計画や会報の配布など雑用を引き受け、この句会を支えています。

池さんによれば、「この句会は、流派などにとらわれない、広い視野に立った俳句会です。書かれていない空白の思いを、みんなと鑑賞し合うところに俳句の魅力があり、頭も使うので、老いを防ぐにも良いと思います。」とのこと。

長い間続いてきた岩村句会のもしびが、これから先何十年もまた続き発展することを願っています。

会員のかたのひと言

○俳句は私の生きがいで、いつも頭にムチ打って作っています。

（福船　大畠新草さん）

○古いだけで、下手の代表です。仕事が忙しく、もっと俳句に専念したら上手になるかも知れません。

（金地　島崎慌一さん）

○家族以外に、横の人間関係を持てるのがうれしいです。

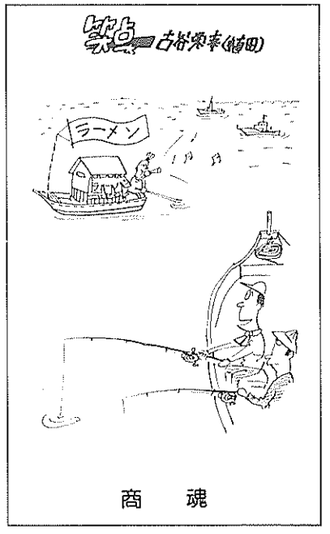
（金地　西本かよ子さん）

○和気あいあいの雰囲気が大好きです。

（堀の内　北岡高子さん）

○心の豊かさを――と二十六歳から始めました。他の趣味は旅行ぐらいです。

（福船　和田幸郎さん）



南国歌壇

朝月は岡豊山の上にあり
　ジョギングの人堤防を行く
　　西島　**岡林きよ**

柚子の香はもたぬ「直七」ゆたけくも　酢を貯へて庭に実れる
　　西野田　**吉川定子**

長生きはすれど荷物になるまじと　軽に労りし足いとおしむ
　　立田　**北村ちづ**

俸せの無きまま夫より生きのびて　透し見る手に浮きし静脈
　　植野　**永野美由**

出撃の遺書も並びし資料館に　痛みは甦える鹿屋特攻基地
　　岡豊町　**武樋信子**

人の手で味覚の季節変りしも　変らぬものは月見なるかな
　　前浜　**大原正明**

南国柳壇

来世では愚痴は云ふまい盆の花
　　三嶺　**井沢正子**

行きずりの子供が孫に見えて泣く
　　十市　**大家寿恵子**

古道具明治が香る倉の中
　　植田　**吉本其梅**

金婚のまぶしさ百の白むくげ
　　岡崎美枝（〃）

婆を迎えに何人も佇つ北国の夏
　　公文政子（〃）

流木の根っ子が坐る川施餓鬼
　　木戸　節（天狼俳句会）

若竹の根の剣・鉾壊え古墳
　　山中日爽（〃）

はたはたの飛翔未完の滑走路
　　中村祭生（〃）

岩肌に滴り落ちる山路行く
　　窪田千代子（おがたま会）

幼きが座りこみ描くほうせん花
　　末政須賀（〃）

語り継ぐこと語りつつ墓洗う
　　浜田弥芳（〃）

夕すげが皆こちら向きひとりの刻
　　永田ますき（忍冬句会）